

## 第10回 仮面ライダー1号(バンダイ)の巻



前回からバイクつながりという事で。このキットは大ブームとなった「仮面ライダー」放送当時のものでは有りません。ガンプラブームを過ぎる頃(気のせいかその頃のキットばかり紹介しているなあ...)に新規にキット化されたものです。ライダーを乗せたマシンがブルーバックゼンマイにより走行するもので、4種類のライダーマシンが発売されました。現在ならクレーンゲームの景品にすると当たりそうな内容ですが、当時は単色成形の要接着キットとして売られていたのです。それにしても突然の模型化には驚かされました。

今回は模型そのものではなく、「同一アイテムを再度商品化する」という事について考えてみたいと思います。以前商品化したものを新規に再商品化する理由としては

- (1)従来のキットに修正しなければならない箇所が存在する
- (2)そのアイテム自体の人気が高くて売上げが期待できるが以前のキットを再販することが難しい
- (3)技術や素材の進歩により、従来以上の魅力を持ったキットを投入し利潤をあげられそうである

というような事が考えられると思います。(1)のわかりやすい例としては誰も正しい形状を知らずに売り出したステルス爆撃機、(2)では金型トラブルに起因する多くの絶版キット、(3)はガンダムプラモの進化を見ればお分かりでしょう。では仮面ライダーシリーズにおいてはどうか?私は(3)ではないかと思うのです。

### ■側面



手元の資料によれば仮面ライダーのプラモデルが初めて発売されたのは昭和46年、(写真で見る限りは)転がし装甲も出来ないサイクロン号とライダーのセットです。

昭和50年頃になるとゼンマイボックス取り外し式(つまりゼンマイ走行)のライダーマシン('仮面ライダーX'以降)が登場します。ゼンマイ(及びタイヤの可動)を獲得したことになります。このゼンマイ付きキットの価格は(私の記憶が確かなら)700円位で、当時の子供が気軽に買うことは叶わない豪華なものでした。しかも、今の目で冷静に見れば、走らせるとすぐ壊れてしまいそうなキットです(勿体無くて走らせなかつた、という方も居られるかもしれません)。

そして昭和57年、いよいよこのキットの登場となります。「チョロQ」等でおなじみのバックゼンマイをボディに組み込み、小さい



模型情報 1988年1月号より転載

キットデータ	
メーカー	バンダイ
スケール	NON
当時価格	300円

部品も少なくして気軽に遊べるようになりました。当時の情報誌にも「動力モデルには動力モデルの魅力があるから」と説明されています。う~ん、成る程。しかし幾ら何でもライダーの搭乗ポーズは不自然そのものです。

この後、ライダープラモには更なる進化が訪れます。昭和62年、「仮面ライダーBlack」シリーズのバイク2台は1/20スケールのマシンにバンダイ十八番の多種多色同時成形によるフル可動ライダー人形がセットされました。ここに来てマシンだけではなくライダー自体にもプレイバリューが授けられることになります。マシンに自然体で搭乗する事が出来るようになったのは云うまでも有りません。